

縄田 IS 相談会

2022 年 6 月 30 日（木）10 時～12 時

オンライン

相談テーマ

「資源人類学とマルチスピーズ研究から 何を学び取り、どう超えていこうとしているのか」

出席者 縄田浩志（秋田大学教授）、
内堀基光（放送大・一橋大名誉教授）
奥野克巳（立教大学教授）
松田素二（地球研・特任教授）

まず今相談会の意味と期待される役割についてプログラムディレクターから説明があった後、研究代表の縄田さんから、今回特にコメンテーターから助言を受けたい点について、あらかじめ提出されたディスカッションペーパーにそって報告があった。また同時に研究の全体像と概要についてはパワーポイント資料を用いて説明がされた。

縄田 IS のアイディアの根幹にある概念ツールとしての「資源」と「マルチスピーズ」の視点について、まず内堀さんから「資源」に関するコメントがあった。資源を考える際、常に持続可能性を好ましいものとして議論を出発させることを一旦やめて、資源に伴う「配分」の問題や、それが終焉する状況、あるいは人間という存在が希望ではなく、終焉する事態を念頭に入れてこそ、資源とマルチスピーズ研究を架橋する意義がある。

マルチスピーズというとき、単に家畜、動物、植物だけでなく非生物を含む全環境を対象にする必要がある。その際、それぞれの存在ごとに、それにとっての資源や環境が作り出されており、それらが相互に絡み合うことによって世界が成立するという見方が、マルチスピーズと資源を両方同時に射程に入れる条件である。

続いて奥野さんからは、まず現代マルチスピーズ研究の最前線においては、三つの方向性が分岐しており（1 民族誌・人類学的視点、2 パフォーマンス、アートと共創する視点、3 社会実装に傾斜する視点）、地球研のプロジェクトとしては、1 よりも 3 の先行研究から多く学ぶことができるという助言があり、具体的にはアナ・チンたちが試みている Feral Atlas プロジェクトが参考になるという指摘があった。またそこにおけるマルチスピーズ視点は、単に人間以外の種を視野に入れるという生態学では当たり前のアイディアとは異

なり、人間が数百年以上かけて作り上げた infrastructure を活用して人間以外の種（動物、微生物、植物、菌など）が自分たちの世界を拡張したり変容させたりする複雑な作用を通して世界と歴史を組み直す点に最大の意味があることが強調された。また内堀さんが提起した、非生物をマルチスピーズ視点に取り込む方法として、奥野さん自身はアニミズムを対象とした研究を行っており、非生物の取り込みはこれからの可能性の一つとして検討できるという指摘があった。

縄田 IS の最大の、そして新しい挑戦は、これまで工学系自然科学系に偏重していた資源を、単に文化資源、象徴資源に拡張するだけでなく、これまでの資源論者と同じ対象を異なる視点でアプローチする点にあり、そのための方法としてマルチスピーズ視点に注目している。その繋がりや展望が、これまでやや不明確であったものが、今回の相談会を通じて、そのつながりが明確になり、今後の研究の進展に大いに役に立つものとなった。